

# 豊中の地形を 楽しむ

地形をもとにまちの歴史を見つめる面白さに出会って、大阪の地形をみんなで楽しもうと「大阪高低差学会」を立ち上げた新之介さん。「豊中は起伏に富み、地形散歩が楽しいエリア」と話す。豊中の地形の特徴をお聞きし、見どころを歩いてみました。

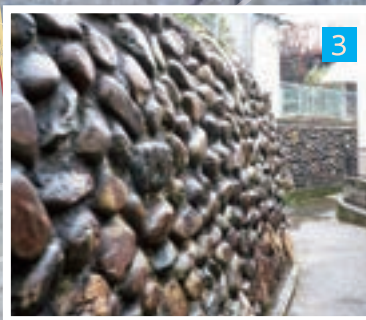
地形図上のアルファベット記号は、本誌の各ページで紹介した場所を記しています。



1 市役所からほど近い、能勢街道沿いの住宅がまたぐ大きな高低差。ここが南に伸びる谷の始まり。



2 緩やかなカーブは「かつて水が流れていた痕跡」と話す新之介さん。



3 谷底を彷彿とさせる石垣。

## 豊中が海だった頃



古代の豊中の土地は森と海でした。千里丘陵の裾野に広がる豊中台地の末端が現在の曽根駅辺り。約6千年前(縄文時代前期)の大阪は、生駒山山麓から西側に河内湾と呼ばれる海が広がり、今の服部や庄内地域は海の底。3D地形図(右地図)を見ると、曽根駅の少し南から始まる大きな高低差が見とれます。陸地の端が波で削られてきたもので、かつてここから南側は海だったときの名残です。

かつての海岸線の先端部分には、大きな高低差が今も残っています。

川の氾濫を防ぐために堤防を築いたあと、上流から運ばれた土砂で河床が高くなると、さらに高い堤防を築くことを繰り返した結果、まわりの土地よりも高い場所を流れるようになった川を天井川といいます。

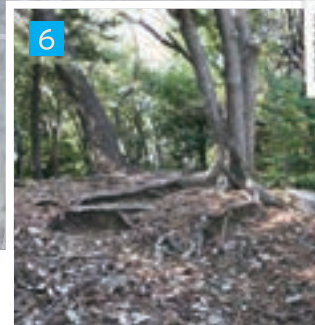
## 南部が水田地帯に発展、台地の古を物語る古墳群



その後、淀川と大和川の土砂が流れ込んで河内湾が陸地化していくとともに、豊中も全域が陸地となります。稲作が行われるようになる弥生時代の遺跡が、市域北部だけでなく穂積や小曽根でも見つかっています。そして、台地の上に多数の古墳が築かれる時代が訪れます。「豊中で見逃せないのは、古墳の多さ。前方後円墳があるのはヤマト政権とかかわりの深い豪族がいたからだろうと思われれます」と新之介さん。

## 高台に刻まれた谷の跡

全国の天井川のうち約半数が関西地方に存在します。豊中では高川と天竺川に天井川の部分があり、高川には、河床の下を府道がくぐる天井川トンネルがあります。



豊中台地の南西の縁にあたる場所には、中世の時代、原田城がありました。現在は、旧羽室家住宅(曾根西町/登録有形文化財)の庭園の一部に当時の土塁(土を積み上げた塹)が残っています。「この辺りは大阪平野を一望できる高台です。当時は海岸線までも見渡せたでしょう」と話す新之介さん。「豊中台地には河川などで浸食された数多くの谷が刻まれています。地形の境目をたどると、かつては谷底で水が流れていたのだろうと思える曲がりくねった路地があつたり、崖の痕跡に出会ったりします。昔のまちの姿を想像して楽しむことができるのが地形散歩の面白さです。」

もとは城の周りにめぐらされていた土塁の一部。年月を経て草木が生い茂り、森のようになっています。

※ 地形図はカシミール3Dで作成しています。(新之介さん提供)



## 新之介さん

郷土史に関心を持ち、2007年から旧街道沿いに点在する古い街並みなどを記録に残したいとブログで発信を始める。2013年に大阪高低差学会を設立し、大阪の歴史と地形に着目したフィールドワークを続けている。著書『凹凸を楽しむ 大阪・高低差』地形散歩』の出版をきっかけに、NHK番組『プラタモリ』に大阪の案内人の一人として出演。